

<2004年1月>

『兵は凶器なり』 - 15年戦争と新聞

1926 - 1935

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

第一章 なぜ戦争を阻止できなかったか、新聞の戦争責任を問う

一九八六年(昭和61)秋、新聞と読者が火花を散らす熱いふれ合いがあった。しかし、東京ではなく大阪での出来事だったため、その重要性が広く知られることなく終わった。それは、『朝日』の大阪本社版の読者欄で繰り広げられた「新聞と戦争」についての読者と新聞との真剣な応酬である。新聞の戦争責任については現在まで、各紙ともこれを避けてきた。

言論の自由や他の戦争責任については常に論じながら、昭和戦前の新聞はどうだったのか、どうして自由な言論は軍部、政府に屈伏し、ウソの報道で塗り固められたのか。その原因はどこにあったのか。

こうした自らの戦争責任については、口を閉ざしてきたのである。

ところが一読者の質問に対して、『朝日』は自らの戦争責任について真正面から答えた。9月11日朝刊から4回、秦正流氏(朝日新聞社史編修顧問)は「戦争と新聞」というタイトルで、大きなスペースをさき、なぜ新聞は屈伏したのか、満州事変前後から太平洋戦争、敗戦までの新聞の敗北の歴史について語ったのである。

大阪朝日の読者欄で「戦争と新聞」でホットな論争

読者からも大きな反響があった。『朝日』はこの連載への反響が大きかったため、さらに10月17日から、秦氏と読者二人による座談会「戦争と新聞をめぐる」(上・中・下)を連載、引き続いてこの座談会を読んでの意見も掲載するなど、約2ヵ月以上も、読者と新聞社のホットで真剣なやりとりが続いた。

残念なことは、この新聞界でも画期的な試みが、東京本社発行の『朝日』では全く掲載されなかったことだ。これは各新聞社とも事情がいっしょだが、東京本社発行の最終紙面が縮刷版に使われるため、今後とも現物の新聞をみる以外には大阪以外の読者は永久に読む機会がないことになる。

今回の一連の論議を紹介しながら、秦氏の記述とともに、新聞の戦争責任についても一度考えてみようと思う。

大阪発行の『朝日』は読者欄を見開き2頁にして、意欲的に読者の声を特集し続けている。この姿勢は他紙にみられないもので、従来の読者欄にないホットな交流が生まれ、鋭い問題提起と深く考えさせられる事実が次々に掘り起こされた。



< 開戦を伝える朝日新聞 >

一九八六年四月十六日に京都市の女性(27)が朝鮮国籍の男性と恋愛し、結婚したいと思ったが、父親や親類が猛反対し、気持ちがグラついてどうしたものか、という内容の投書が掲載された。

これをきっかけに、在日韓国、朝鮮人への差別の問題から戦前の朝鮮支配の歴史へと投書が山のように続き、「旧朝鮮統治」と題する投書特集が続いた。

この延長線上に< 新聞の戦争責任を問う > 一通の投書が舞い込んだ。一女性の疑問の声が戦争と新聞という巨大な、そして重いテーマの扉をこじ開けた。兵庫県の主婦(28)の次のような手紙であった。

「戦争についても、知りたいことはたくさんあります。特に知りたいのは、当時でも良識のある人はたくさんおられたでしょうに、どうしてあんな悲惨な結果になるまでいったのか、ということです。

言論の自由は、どんなふうになされてしまったのでしょうか。弾圧が加わったという点では新聞も被害者ですね。でも、国民に事実と全く違う情報を流し、だました(扇動した)という点においては、新聞も戦争に加担したことにはなりませんか。

いつから、どんな圧力が加わってきたのか、そしてどうなったのか。それに対し新聞社は、記者は、どんなことをしたのか、そしてどうなったのか。そろそろ書かれてもいいのにな、と思うのです。

今聞き出しておかないと、当時の記者や経験者はどんどん減ってしまいます。今聞き出しておかないと、また不穏なくすぶりが出てきたとき、すばやくたたき消されないではありませんか……」

戦争を知らない世代の大部分の国民にとっても、これはごく自然な疑問だろう。戦争を直接知っている世代は残り少ない。あと20年もすればすっかりいなくなる。そうした点を考えると、今は直接体験や正確な証言を伝え聞いておくラストチャンスといえるかもしれない。

この投書は大きな波紋をなげかけた。八月六、七日の両日、この反響について特集が組まれた。同じような趣旨の「なお問いたい戦中の言論屈伏」という投書も京都府の主婦(57)から寄せられた。



日本軍の真珠湾攻撃

「なぜ、ああなったのか。どうして、どのように国民の目と耳がふさがれていったのか。つまり、いわゆる 5WIH に相応する事柄を赤裸々に公開し、それを語り継いでいく。この事を戦争体験自体と併わせて語り継いでいかなければ、真の平和運動とはなり得ない。……暗い過去のすべてを国民の前にガラス張りにした時、はじめて『あの過ちは繰り返さない』という言葉が生きてくる」

秦正流氏(朝日新聞社史編修顧問)が戦争責任を語る

語り合うページの担当者はこの2人の問いかけに真摯に答えて、秦正流氏へのインタビューを行った。

「いま、新聞編集の実務に携わっている者はすべて戦後入社世代です。戦前、戦中の報道のあり方を国民に謝罪したことも知っていますし、だからこそ、あの過ちを繰り返すまいと心して報道にあたっています。しかし自身の体験として、その過ちへの道を証言することはできません」担当者はこう理由をあげ、秦氏へ読者の声を伝え、インタビューした。

自らを省みて、批判に対して謙虚な姿勢をとることは、ジャーナリズムの原点である。読者の疑問に自らの恥をさらすことであっても、『朝日』の誠実に応じようという態度は貴重である。

さて秦氏は1936(昭和十一)年、大阪朝日入社、通信部、東亜部、戦後は経済部、モスクワ支局長、外報部長を経て、専務取締役となり、この時は社史編修顧問とその経験、経歴に不足はない。

秦氏は「戦争と新聞」の連載第一回目で、新聞の戦争責任を素直に認め、朝日新聞は二度とこうした国民への背信行為を繰り返さないために「自らを罪する」社説のなかの「国民と共に起たん」の宣言を原点として、常に自省自戒してきた、と強調する。読者にその点を語ってこなかった点は「大きな油断であり、失態でさえあった」と反省の弁を語る。

そして、なぜ戦争に協力したのか、その原因を次のように述べている。少し舌足らずで説明不足の点もあるが、新聞だけが悪いのではなく、国民も政府も財界にも責任はあるというのである。

新聞はなぜ戦争に協力したか、

「新聞が、どうして戦争協力に走ってしまったか。それは新聞自体が生きのびるためであった。そのような新聞を国民が望んだことも、つまり鶏と卵の関係が生じていたことも忘れてはならぬ。鶏と卵のどちらかはともかく、新聞だけがその原因をなしたのではなく、最大の責任は軍部を抑え切れなかった政府にある。その政府を支援してきた財界にもあったということだ。今も」

第2回目では、1931(昭和六)年の満州事変前後から、五・一五事件(1932年)、二・二六事件(1936年)へ至る軍部ファシズムの勃興の歴史、経過にふれながら、そのなかで、軍の横暴を正面から批判してきた『朝日』が右翼や暴力のターゲットにされたことを強調する。

「新聞も弾圧された。特に満蒙問題などについて軍の横暴を繰り返し批判した朝日新聞に焦点が合わされたのです。右翼、愛国諸団体は、何かというと決議文や斬奸状を社に突きつけてきた」

そして、満州事変が勃発した。関東軍が仕掛けた謀略によって起きたものだが、秦氏は新聞は知らなかったとする。

「柳条湖事件のとき、朝日新聞は特派員を現地に派遣していたけれど、あれはこちら

が仕かけたとは知らされてなかった。『全責任は支那側にある』と朝日新聞も憤慨した。ただし、その時はまだ、『局地的に解決せよ』と、事変の不拡大、早期収拾を主張しました。さらにこう主張する。

「ジャーナリズムは当時、たしかに批判するべきは批判した。とはいえ、満州を生命線とする、という大陸政策に協力させるためには、軍部は国民精神を総動員しなければならない。その政策の実現に支障をもたらす自由な報道は許されなくなった」

第3回目は二・二六事件以後に触れているが、秦氏はこのなかで「二・二六事件以降、(朝日は)軍への抵抗をやめた」と述べる。社も記者も一枚岩ではなくなる。亀裂が入る。現実追認論者も出てくる。秦氏はこれが一番怖いという。

「記者のなかには軍と同じような考えの者が出てきて、同僚の批判的な記者を牽制し始めた。また、記者の大半は言論統制に内心では反発しながら、戦時下なので戦意高揚の邪魔になってはいけないと従っていった」というのである。記者は知っていて書かなかったのか、との読者の問いかけにはこう答えている。

「全戦局については、記者は知らなかったことがかなり多い。しかし、自分の担当については知っている事が多かった。では知っていた事をすべて書いたかという、私は全部書いてなかったと思う。たとえば全滅の場合、それは知っていても『壮絶なる玉砕』と、忠勇ぶりを美化する」

敗戦の時、秦氏はどうしていたか、新聞記者の戦争責任について、どう思うかという質問にはこう述べる。

「現実追従主義」に陥らぬよう、自戒しなければならない」

「私は『新聞記者を続けられるものではない』と考えた。とりわけ、新聞社と新聞記者は国民の戦意高揚の一翼を担ってきたのだから責任は重い』と思ったが、「引き揚げ後、大阪本社へ入社し、信夫韓一郎編集局次長らに報告後、『記者をやめたい』と言った。その時、信夫局次長がこう言った。『秦君、よく分かる。われわれも同じ気持ちだ。しかし、皆が辞めたら、どうなる。責任をとったようで、これからの大事な時代に対して責任を回避したことになるのか』』と言われ、思いとどまった、という。

第4回目は戦後の問題に入り、社説については「大事なことは何を主張したかであって、自分の思うようになったか、ならなかったかではない。『現実主義』を唱えている

うちに、『現実追従主義』に陥らぬよう、自戒しなければならない」と主張する。

そして「言論の危機は徐々に徐々に近づいてくるものだ。読者と新聞が力を合わせ、危機の初期の段階で断固として抵抗すれば、戦前・戦中の悲劇を繰り返さないですむ」と結んだ。

秦証言はスペースの制約もあり、かけ足で複雑な歴史的な事実と言論弾圧の実態を述べたため、説明不足の感はまぬがれなかった。これにも約四十通の投書や手紙がきた。十月八日から再び、三回、秦証言をめぐるという特集「手紙」が組まれた。

とにかく、延々と続けていく、この欄の担当者の執念にはいい面のジャーナリズム精神が宿っている。

その投書のなかで、痛烈に秦証言を批判した投書があった。映画監督、フリージャーナリストの岡本愛彦氏である。

「残念ながら秦氏の回答は極めて歯痒い自己弁明的なものであり、秦氏に対して一定の評価を抱いていた私にとって失望はかなり大きなものがありました」と前置きして、岡本氏はこう指摘した。

戦争中の新聞は国民を戦場にかり立てた『戦犯』

「日本のすべての大新聞は一片の謝罪社説を発表しただけで、決して許されるべきではなかった戦争加担責任を自らの手で許してしまったのです。

(秦氏が記者を辞めたいと申し出て慰留されたことは) 実に『日本的』な責任論でしかないと思わざるをえません。本来なら朝日新聞(他の新聞社も)は解体され、すべての社員、記者は自らその職を去り、明確に戦争責任を取るべきではなかったのか。

.....戦争中の新聞は国民を戦場にかり立てた『戦犯』でした。そのことへの更に厳しい自己批判無しに『報道の自由』を口にするには決して許されない行為だと思うのです」

この投書は読者に鋭くアピールした。ある主婦は秦証言を読み、その歯切れの悪さに、『朝日』から他紙を購読しようと思った矢先に、岡本氏の「手紙」を読んで、こんな読者がいるならと思いとどまったという。

読者と新聞の血のかよった交流はさらに続く。

十月十七日から3回、秦氏と問題提起者の兵庫県の主婦、フィリピン・ミンダナオ島へ従軍した兵庫県の男性(六六)の三人で座談会「戦争と新聞をめぐる」が開かれた。

岡本氏の鋭い問題提起を受けた形で、秦氏は冒頭でこう述べている。

「『確かに新聞の戦争責任は重い。しかし、日本の再建は日本人がやるしかない。記者をやめるのは責任をとったようであり、逆に無責任なやり方だ』との考えに、私も他の従業員も同意したのです。そのためには、まず率直にわびなければならない。

なぜ、国民を誤導してしまったかを自己弁明的ではなく、きちんと説明し、そのうえで二度と同じ状況を作り出さないという決意を示さなければならない。それが『国民と共に起たん』の宣言であり、当時の社説なのです。

決して、自らの罪を許したのではない。言論報道機関として、本来の任務を果たすことができなかつた罪を自覚し続け、再び読者・国民を裏切ることのないようにと国民に誓約したものであり、その精神を守り続ける義務を自らに課したもののなのです」

また、主婦は最初の疑問である「まだ戦争を食い止められたかもしれない、といえるのはどの時期までだったのですか」をぶつけたが、秦氏は「満州事変の前」として、こう述べている。

新聞記者失格

「あの時期、他の新聞も結束して当たればあんな事態にはならなかつただろうが、こちらが難しいところ。ひとつ離れ、ふたつ離れ、体制に順応し、御用化していく。朝日も玉砕するわけにいかないと、後ろからついていく。お先棒はかつがなかつたが、結果としては同じことだった」

さて、延々と秦証言をピックアップしてきたが、この座談会での発言も新しい部分はあまりないので、これ以上はつけ加えない。

十一月八日にこの座談会についての投書が載ったが、そのなかの一通だけを紹介する。

「戦争中の記事を覚えている人間からすれば肩すかしを食わされた思い」とこの座談会の印象を述べたあと、自分の友人の父であった新聞記者は筆を折ったという。

この人物は四年余り従軍記者をしていたが、酒に酔うと口ぐせのように言っていた。

「『俺は新聞記者なんかじゃなかった。意気地のない講釈師だった。ほら“講釈師見てきたような嘘を言い てな川柳があるだろう。あれだよ。夜陰に乗じて単身敵陣にきり込み、日本刀でアメリカ兵十数人を血祭りにあげた武勇伝をニッパ椰子の木陰で作り上げ、東京の本社へ送ったりしたもんだ。こんなことは各社競作だったよ』と涙を浮かべながら、しみじみと語ってくれたものである。戦後間もなく復員したこの人は、潔く新聞社を辞め、再びペンを持つことはなかった」

秦氏だけではなく、ジャーナリストにとって、これは重く苦い問いかけであろう。

今、大切なことは戦争を知らない世代の疑問、なぜ、自由な言論が屈伏していったのか、を真剣に学ぶことであろう。読者ばかりではない。新聞記者の大部分さえもが、どのようにして新聞および放送が大本営発表一色となり、国民をあざむくウソの報道をするようになったのか、恥ずべき歴史を知らない。(つづく)